

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 立本 紘之

本論文は、1921（大正 10）年の雑誌『種蒔く人』創刊から 1934（昭和 9）年のプロレタリア作家同盟（ナルプ）解体までの 10 余年を対象とする。日本共産党の影響下に展開された当該期の社会運動のうち、労働運動や農民運動ではなくプロレタリア文化運動を取り上げることで、文化運動において「権威」が形成されていく過程とその要因を考察した。

当該期のプロレタリア文化運動につき、大原社会問題研究所が所蔵する一次史料等から通時的かつ実証的に分析した研究はこれまでなかった。共産主義理論の正統モデルがドイツ型からソ連型へと移行する時期にあつて、ブハーリン等の政治理論が、理論雑誌ではなく『種蒔く人』の後継誌『文芸戦線』に載せられていたこと、またコミンテルンの「27 テーゼ」が最初に掲載されたのが『文芸戦線』であったことを思えば、文化運動への着目は有効な視角だとわかる。

日本共産党が大衆の目の前に姿を現わした期間は 2 年に満たなかった。そうであれば、「見える」文化運動に携わる人間が、「見えない」党や党の指導者をいかに捉えたかと問うことには大きな意義があろう。これまでの研究では、党中央による指導や権威は、いわば、上から「降ってくるもの」と理解されてきたが、本論文では、文化運動に携わる人々が、党や党の指導者を見る、下からの視線をダイナミックに描いた。

本論文は 6 章から構成され、以下の諸点を明らかにした。『文芸戦線』が創刊された 1924 年の時点において、文化運動に携わる人々にとって、革命運動の組織体は各国独自に存在するものとみなされており、コミンテルンや党組織による統制を、権威として受容する段階にはなかった（第 1 章）。1925 年末に『文芸戦線』同人を核としてプロレタリア文芸連盟が結成された時点から 27 年にかけて、労働農民党の事実上の機関紙『無産者新聞』を権威として仰ぐ精神構造が生まれた（第 2 章）。コミンテルンの拘束力が実のところ弱かった日本において、文化運動に携わる人々は、文化運動組織の分裂や合同を行う際、「党の存在を感じて」行動していた。党の指導者の側もまた、文化運動に従事する人々に対し、党の存在を感じさせることで、文化運動への党の影響力を確保しようとした（第 3 章）。1928 年の 3・15 事件以降の党は、文化運動を蔵原惟人に丸投げした状態といえ、党と文化運動の関係は、党による文化運動の拘束などではなく、党と文化運動の連結と称すべき状態にあつた（第 4 章～第 6 章）。

分析概念が史料の用語に引き摺られている点、戦前と戦後の党組織と文化運動の関係性については更なる実証が必要な点等、残された課題はあるものの、それは本論文が研究史上に持つ価値をいささかも減ずるものではないと考える。よって、本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。